

述している点も本論で批判したが、それを裏付けるのが文例(37)である。

前肢を立てている場合は、「うずくまる」と「しゃがむ」の区別が不明瞭であるが、前肢も折ってあれば「うずくまる」のみで表現されよう。また、「丸くなって」と「うずくまって」がパラフレーズされている点

も興味深い。

以上の他にも、本論を裏付けるもの、あるいは逆のもの、様々の用例が存在すると思われるが、御教示頂きたい。合わせて、本論への批判等も頂ければ幸いである。

よわまる・よわる・おとろえる

吉田光美

1. はじめに

「よわまる」「よわる」「おとろえる」は、低下という変化をあらわす点で意味的に類似している。しかし、これらは常に言い換えができるわけではなく、各語間には意味の相違が感じられる。そこで、ここではこの三語をとりあげて分析検討し、それぞれの語の意味特徴を探ってみることにする。

2. 分析

- (1) 水圧が よわまる。
- (2) *水圧が よわる。
- (3) *水圧が おとろえる。
- (4) 権力が よわまる。
- (5) *権力が よわる。
- (6) *権力が おとろえる。
- (7) 期待が よわまる。
- (8) *期待が よわる。
- (9) *期待が おとろえる。
- (10) スピードが よわまる。
- (11) *スピードが よわる。
- (12) *スピードが おとろえる。
- (13) 風が よわまる。
- (14) *風が よわる。
- (15) 風が おとろえる。
- (16) 体力が よわまる。
- (17) *体力が よわる。
- (18) 体力が おとろえる。
- (19) *記憶力が よわまる。
- (20) *記憶力が よわる。
- (21) 記憶力が おとろえる。
- (22) *運勢が よわまる。
- (23) *運勢が よわる。
- (24) 運勢が おとろえる。

- (25) *容姿が よわまる。
- (26) *容姿が よわる。
- (27) 容姿が おとろえる。
- (28) ?心臓が よわまる。
- (29) 心臓が よわる。
- (30) 心臓が おとろえる。
- (31) *金魚が よわまる。
- (32) 金魚が よわる。
- (33) *金魚が おとろえる。
- (34) *糸が よわまる。
- (35) 糸が よわる。
- (36) *糸が おとろえる。
- (37) *(私が) 大切な本をなくして よわまる。
- (38) (私が) 大切な本をなくして よわる。
- (39) *(私が) 大切な本をなくして おとろえる。

「よわまる」は(1)(4)(7)(10)(13)(16)の例からわかるように、抽象物を主語にとることができる。低下するものは、抽象物の強さの程度(強度) [(1)(4)(7)(16)], 速さの程度(速度) [(10)], 勢いの程度 [(13)] である。ただし、勢いは自然現象^(注1)の勢いの場合に限られる。

程度の変化にはさまざまな段階が考えられるが、「よわまる」はゼロに至らない範囲内でのあらゆる段階のマイナス変化(低下)に用いられる。

(19)は「記憶力」すなわち抽象物が主語であるが、「記憶力」の低下は良さ(価値)の低下であって強度や速度の低下ではないので、「よわまる」は使うことができない。(22)も勢いの低下ではあっても主語が自然現象でないので、やはり「よわまる」は使えない。

また、ふつう「よわまる」は具体物を主語にとらない。^(注2)

これに対して「よわる」は(29)(32)(35)(38)の例のように、具体物を主語にとることができる。低下するものは、生物では健康状態 [(29)(32)] や心理状態 [(38)], 無生物

では丈夫さ〔35〕である。「よわる」では、「よまる」のように単に程度が低下するのではなく、具体物が質的に変化し、それに伴って程度が低下する。

また、「よわる」は一般的に好ましくないとされる状態への変化（悪化）でもある。

ところで、「よわる」は(2)(5)(8)(11)(14)(17)(20)のように、ふつうは抽象物を主語にとらないが、次の例に限って抽象物が主語になりうる。

(40) 視力が よわる。

しかし、(40)は

(41) 目が よわる。

とほとんど同じ意味といってよく、程度の低下であってもそこには質的变化や好ましくない状態への変化も感じられるので、この場合は特に「よわる」が使えるのであろう。

(17) *体力が よわる。

(42) 体が よわる。

(17)(42)は(40)(41)の例と似た関係にあるが、(17)のような言い方は不自然である。これは、「体力」の低下が「視力」の低下と違って、必ずしも好ましくない状態への変化を意味するものではないためであると思われる（「体力」の低下には「非常に体力がある」状態から「ふつうの体力」への変化の場合もある）。

「おとろえる」は(15)(18)(21)(24)(27)(30)からもわかるように、抽象物・具体物のどちらも主語にとることができる（ただし、抽象物としては身体的力・精神的力・能力・勢い、具体物としては身体の部分・美しさ・勢いを持つものの場合に限られる）、低下するものは価値と考えられる。

(15) 風が おとろえる。

(15)のような例は価値の低下とは考えにくい感じもあるが、この場合も「おとろえる」ものは実際には「風の勢い」であろうし、勢いは「水が勢い良く流れる」など良い、悪いといった価値的評価のなされうる言葉なので、ここでは(15)なども広い意味で価値の低下に含めて考えることにする。

価値の低下をあらわしている「おとろえる」は、悪化を示す「わるくなる」や社会的地位の下降を示す「おちふれる」「没落する」との言い換えができる場合^(注3)がかなりある。このほか、「おとろえる」は「おちる」などと類似した意味をあらわすこともある^(注4)。

また、「おとろえる」は勢いが悪くなることと強度がおちることをあらわす部分で「よまる」と〔(13)(15)・(16)(18)〕、生物の身体の部分的健康状態の悪化をあらわす部分で「よわる」と〔(2)(30)〕意味領域が重なる。

しかし、「おとろえる」には「よわる」のような好ましくない状態への変化という意味的制限はない。

3. まとめ

「よまる」…抽象物の程度の、ゼロに至らない範囲内でのあらゆる段階における低下。

(i)強度〔主語になりうる語；水圧・出力・火力・軍事力・権力・弾圧・支配・取り締り・期待・同情・傾向・可能性・結びつき・光・音・寒気・痛み・体力・視力…〕

(ii)速度〔主語になりうる語；スピード・動き…〕

(iii)勢いの程度〔主語になりうる語；風・雨・台風…〕

「よわる」…(i)生物およびその身体の一部の機能が低下して不健康な状態になること。〔主語になりうる語；体・足腰・心臓・金魚…〕

(ii)困る、意気消沈するなどの意で、精神的に好ましくない状態になること。

(iii)物が変質して強度が低下し、使用に耐えない状態になること。〔主語になりうる語；糸・布地…〕

「おとろえる」…(i)生物の身体の一部の機能や身体的力・精神的力・能力が低下して悪い状態になること。〔主語になりうる語；体・足腰・心臓・視力・思考力・記憶力・食欲…〕

(ii)美しさが低下すること。〔主語になりうる語；容姿・色つや…〕

(iii)社会的な勢いや自然現象の勢いの程度が低下すること。〔主語になりうる語；国・家・人気・権威・運勢・風・台風・雨足…〕

(注1) 自然現象（光・音・におい・風・吹雪…）は、抽象物とも具体物とも言いきれない面を持っているが、ここでは一応自然現象も抽象物として考えることにする。

(注2) 私自身の内省によれば、「よまる」は具体物を主語にとることはできない。しかし、

(28) ?心臓が よまる。

という言い方を不自然でないとする人もいる。

だが、このような人も次の(43)(44)のような言い方は不自然だとしている。

(43) *目が よまる。

(44) *よまった心臓。

(43)(44)から考えても、やはり「よまる」は原則的には具体物を主語にとらないと考えられるので

はないだろうか。

(注3) 「わるくなる」と言い換えができるのは主語が勢い・記憶力・容姿・色つやなどの場合、「おちぶれる」「没落する」と言い換えができるのは主語が家・国などの場合である。

なお、従来の記述で「おとろえる」と「おちぶれる」「没落する」を比較したものとしては国立国語研究所1972がある。

(注4) 「おとろえる」が「おちる」と類似した意味をあらわすのは、主語が体力・思考力・食欲・人気などの場合。だが、価値的な低下をあらわす「おちる」でも、主語が品質・鮮度・成績などの場合は「おとろえる」と置き換えることはできない。

また、「おとろえる」が「おちる」と置き換えられる場合も、一般的にいて「おちる」の方が「おとろえる」より急激な大きい変化という感じを与えるようである。

「おちる」については、徳川宗賢・宮島達夫1972、森田良行1977、柴田武1976、国立国語研究所1972などに記述がある。しかし、「おとろえる」との比較の方面からの分析などまだ残された問題もあるように思われる。

言語経歴：1958年10月、東京都世田谷区に生まれ、現在に至る。

みつめる・ながめる

迫田幸子

1. はじめに

「みつめる」「ながめる」は、視覚に関して用いられる感覚動詞である。この二語は、多くの場合言い換えができるが、そこには、ニュアンスの差が生じる。たとえば、

- (1) みんなは Aさんのすることを みつめている。
 - (2) みんなは Aさんのことを ながめている。
- (1)と(2)の文は、〈Aさんのすることを見る〉という意味では同じである。しかし、見る態度に微妙なちがいのあることを感じさせる。そして、
- (3) 富士山は ここからながめるのが、一番きれいだ。

という時には、「ながめる」を「みつめる」で言い換えることはできない。

このような差は、二語のどのような特徴によるものであろうか。ここでは、「対象を見るやり方」を分析することによって、二語の差について考えたい。分析にあたっては、機能—視覚をどのように働かせるか、心理—対象に対してどのような心的態度をとるか、の二つの観点から見てゆく。

辞書によるこの二語の語義をあげておく。

「みつめる」

- イ) じっとそのものだけを見る。
- ロ) 長く目をとめて見る。

「ながめる」

- ハ) もの思いなどして、つくづくと見る。

うっとりみつめる。

ニ) はるかに遠く望む。見渡す。

——「新版・広辞林」

2. 従来の分析

「みつめる」については、国立国語研究所1972の中に、「にらむ」との比較においてなされた分析がある。そこでは、「みつめる」の意味を次のようにまとめている。(p. 479~481)

- ① “一定の感情”をこめてじっと見る。
- ② ある目的をもって(ある情報をえたいために)対象を注視。
- ③ 結果として対象を注視。

また、柴田編1979では、「みる」「みつめる」「ながめる」の三語の比較の中で、以下のような分析を行っている。(p. 70~77)

- ⑦ 「ながめる」「みつめる」のどちらも、見る動作を行なう時間が短い場合には使わない。
- ⑧ 知覚される視野が「みつめる」では狭く、「ながめる」では広い。
- ⑨ 「みつめる」では視線が固定されているが、「ながめる」では視線を大きく移動させることが可能。
- ⑩ 「ながめる」では「みつめる」に比べ、心に余裕がある。そのため、「ながめる」は、鑑賞の態度や傍観的態度を含む。
- ⑪ 「ながめる」はく対象物が何であるかすでに認識